

第46図 301-OW出土遺物実測図(2)

301-OWから出土した遺物には、木製品、瓦、陶磁器がある。この内図示したのは木製品と陶器のみである。

1～7は木製品である。1～4は手桶側板と考えられる。折損しているため、高さを決定することができないが、残存部分からみて、恐らく40cm程度になるものと思われる。側板はそれぞれ径にあわせて若干の湾曲をもっている。又、上方に向かい開くため、上端の

辨別 記号	原 産 地 区	器 形 態 類	法 量 I h b	調 整	胎 土	焼 成	色 調	(内面) (外面) (断面)	残存 率	備 考
第45回 1 四版25	F18B E	木器 手柄	残存長 幅 厚さ 34.5 6.1~6.7 1.3	径1.3cmの2孔が並列、左・右端に1ヶ所づつ釘痕跡	—	—	—	—	—	
第45回 2 四版25	F18B E	木器 手柄	残存長 幅 厚さ 31.6 6.9~7.3 0.65	内外面共に平滑に仕上げる	—	—	—	—	—	
第45回 3 四版25	F18B E	木器 手柄	残存長 幅 厚さ 25.7 4.6~5.9 0.65	内外面共に平滑に仕上げる	—	—	—	—	—	
第45回 4 四版25	F18B E	木器 手柄	残存長 幅 厚さ 31.9 7.2~7.4 0.8	上端の左・右端に1ヶ所づつ釘痕跡	—	—	—	—	—	
第45回 5 四版25	F18B E	木器 不明	残存長 幅 厚さ 62.9 9.0 2.2	2ヶ所に釘の打ち込み痕	—	—	—	—	—	
第46回 6 四版26	F18B E	木器 桶蓋	残存長 幅 厚さ 43.5 13.6 1.9	上・下面に製材時の細痕跡、上端・接合部に1ヶ所づつ釘痕跡	—	—	—	—	復元器86	
第46回 7 四版26	F18B E	木器 桶蓋	残存長 幅 厚さ 54.0 15.3 2.9	両端全面に2ヶ所づつの釘痕跡	—	—	—	—	—	復元器54
第46回 8 四版26	F18B E	陶器 鉢	残存高 高台径 2.2 4.7	内・外側とも施釉 裏付に砂目残存	精良	良好	10Y 6/2オリーブ灰 10Y 6/2オリーブ灰 7.5Y 8/1灰白	10%		

第18表 301-O W出土遺物観察表

幅が下端に比べ広くなっている。又、1では上部に直径1.3cmの孔が2個穿たれている。この孔は両面より開けられ、恐らく把手を嵌め込むための枘孔と思われる。材の側面には各所に釘穴が観察でき、これにより側板を接続させている。1では把手部より約5.0cm下の部分にこの釘穴が認められ、この部分が側板の上端に近い位置と思われる。4では側面上端に左右1ヶ所づつ釘穴が確認できる。この側板が、把手部分と直接接続する板材になると考えられる。いずれの側板も外面にはタガの痕跡を確認することはできなかった。5は、残存長60cm、幅9.0cm、厚さ約2.0cmを計る板材である。折損しているため本来の長さは不明である。表面各所に鉄釘が打ち込まれている。これらの釘はいずれも角釘である。6・7は桶の底乃至蓋板である。6は直径86cmに復元できる板材で、表面には加工痕を頗著に残す。円周側面は、側板の開きにあわせて面取りが施されている。又、側面には次の板材を結合するための釘穴が観察される。板材の幅から考えて4枚程度で全体を構成するものと思われる。7も同様の板材である。復元できる直径は54cmで、6に比べ小型で別個体と考えられる。円周部分は面取りがなされ、側板にあわせている。板材の接合面には、2ヶ所に釘穴が認められる。板材の幅からこれも6同様4枚程度で構成されると考えられる。8は唐津系の陶器で、内外面にオリーブ灰色の釉をかけている。

(木下)

## 第Ⅳ章　まとめ

黒石遺跡の調査結果について、前章まで事実関係を中心に記述を進めてきた。今回の発掘調査では、平安時代から鎌倉時代にかけての遺構を検出した。検出した遺構は大きく2時期に分けることができる。当該地に於いて最初に形成される遺構は、12世紀後半から13世紀にかけての時期で、掘立柱建物群と、それに付随する井戸、溝、土坑などを検出した。この時期の遺構は、III区南側でのみ検出され、他地区では確認できなかった。本来、周辺部にも広がっていたと思われるが、当該期以降の耕地造成により完全に消滅している。

掘立柱建物228-O Bと250-O Bは、主軸方位や、建物間隔からみて同時併存したと考えられる。これらの建物に伴い井戸（199-O O）と考えられる土坑などが存在し、1つの屋敷地を構成するものと思われる。

もっと多くの遺構を検出したIII区南側北半部では、遺構が複雑に重なりあって検出された。これらの遺構のうちもっと古いものは、271-O O・176-O O・195-O Oなどの土坑と163-O S・175-O S・184-O Sの溝であり、13世紀末～14世紀初め頃に属するものと考えられる。その後、東西方向の鉢溝が掘削され、さらにその後に南北方向の鉢溝が掘削されている。これらの鉢溝は、いずれも14世紀代に取まるものである。鉢溝については、旧水田（江戸時代）では再び東西方向に掘削されている。そしてこの方向は現水田においても踏襲されている。



第47図　調査地周辺地形図（1/40000）

上述のIII区南側以外のI区、III区北側で検出した土坑・ピットについても、14世紀代に属するものと考えられる。そして、その後包含層が堆積し、旧・現水田が造成される。この他は、14世紀代を境に、集落地としての利用はみられなくなり、農地に転

化されていったことがわかる。

遺物包含層（第3・4層）は、I～IV区のはば全域に堆積しており、中世土器を中心に有茎尖頭器、鉄鎌、土鍤といった遺物も出土している。これらの時期は縄文時代草創期～中世であるが、包含される土器、陶磁器のもっとも新しいものは15世紀代に属するものであり、下の遺構の年代もあわせて考慮すれば、この遺物包含層の形成された時期は15世紀代であると考えられる。

遺物包含層中から出土する遺物について、遺物別に平面的な出土分布状況を検討してみると、瓦について、出土状況に顕著なものがみられた。瓦の出土分布をみると、IV区にその出土が集中しており、なかでもその南端部分に集中がみられる。このような出土状況を呈することから、中世にはこの付近に瓦葺の建物が存在した可能性が強いと思われる。一方、調査地の南西、宮ノ池の西側には、中世に蓮華光寺という寺院が存在したと言われておりIV区での瓦の集中は、この寺院と関連があるものと思われる。また、蓮華光寺跡に隣接する山直中遺跡の今年度の調査でも、寺推定地に近い地区に瓦が集中するという同様の傾向がみられた。

府道磯之上山直線建設に伴う発掘調査の進展に伴い、山直谷内に於いても稠密な遺跡の分布が知られるようになった。谷入口部より三田、上フジ、二俣池北、水込、黒石、山直中の各遺跡が既に調査され、その内容が明らかとなっている。時期別にこれらの遺跡を観ると古墳時代では三田遺跡で前期の土壙群が検出されている。又、後期に入ると上フジ、二俣池北の両遺跡で集落が形成されている。飛鳥、奈良時代に至ると水込遺跡で掘立柱建物群をはじめとする多くの遺構が調査されている。更に平安時代末葉から鎌倉時代にかけては、黒石・山直中遺跡で小規模ながら建物等が発見されている。

この様に山直谷の開発は、主に古墳時代以降、谷入口部より谷奥に向かって徐々に進行した様子を看取することができる。黒石遺跡の調査は、山直谷中央部での開発時期を明確にする上で興味ある資料を提示したといえよう。

（木下・吉村）



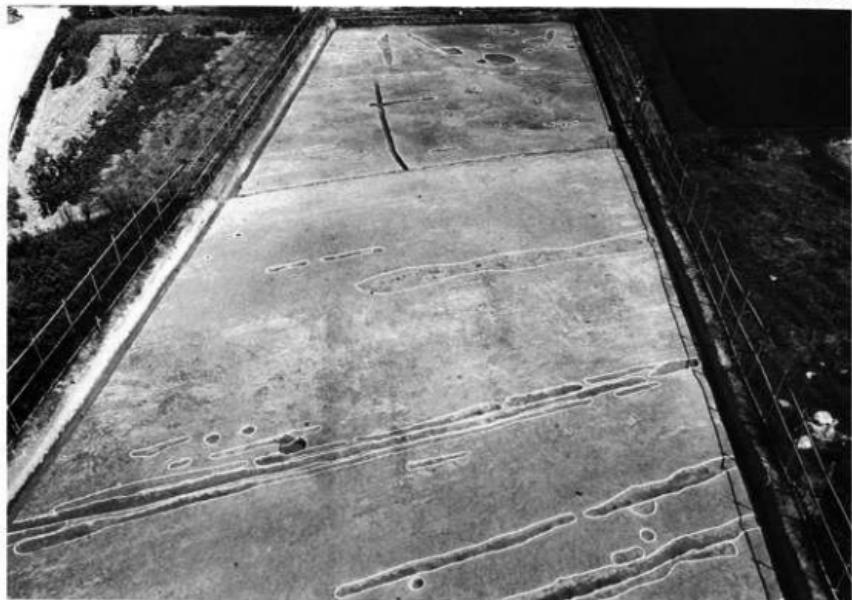
# 図 版



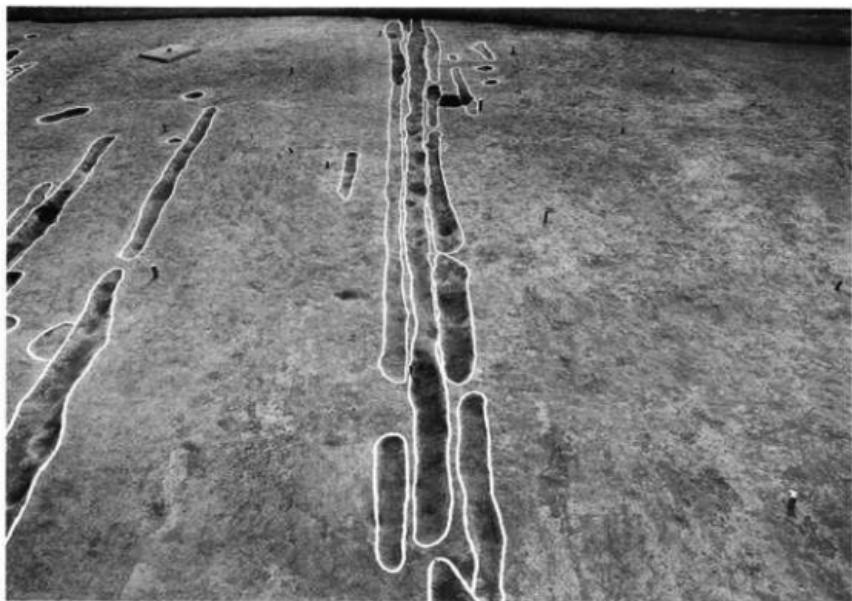
調査地全景 (1/2500)



III区南側全景 (1/200)



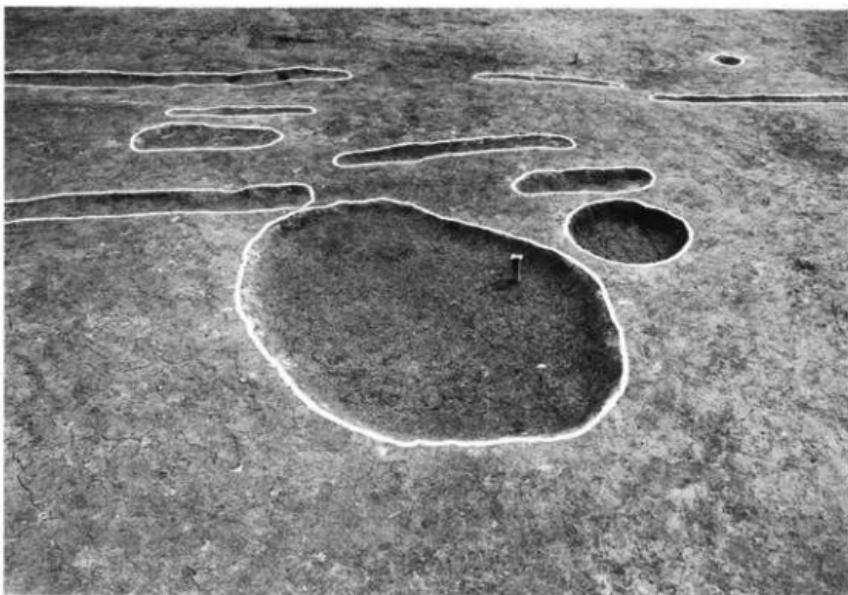
1. I区全景（南より）



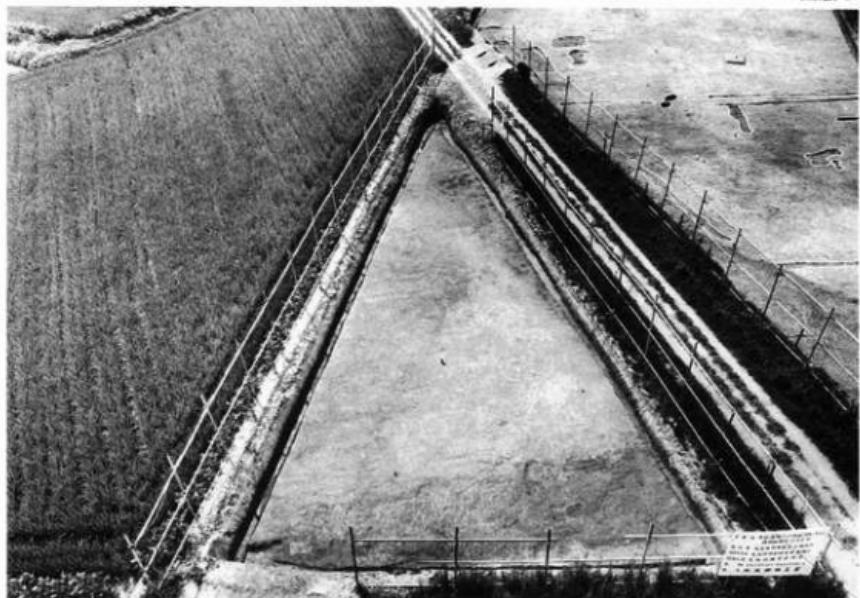
2. I区耕作痕（東より）



1. I区検出遺構（西より）



2. 009-OO全景（北より）



1. II区全景（北より）



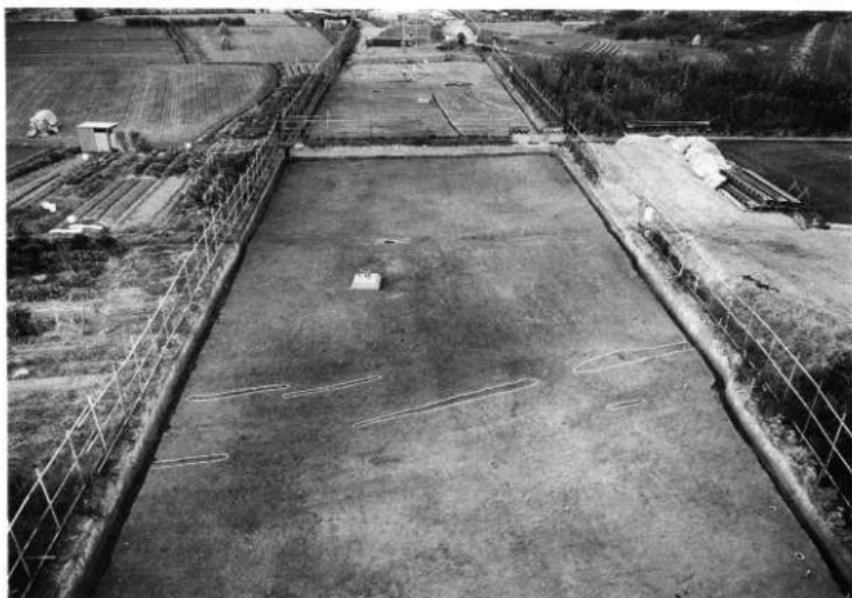
2. III区検出遺構（西より）



1. III区北側全景（北より）



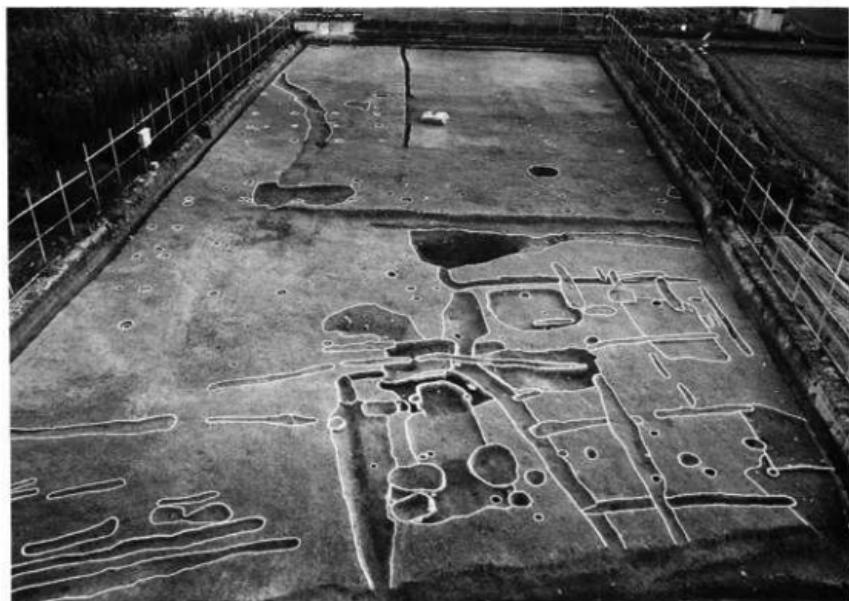
2. III区北側全景（南より）



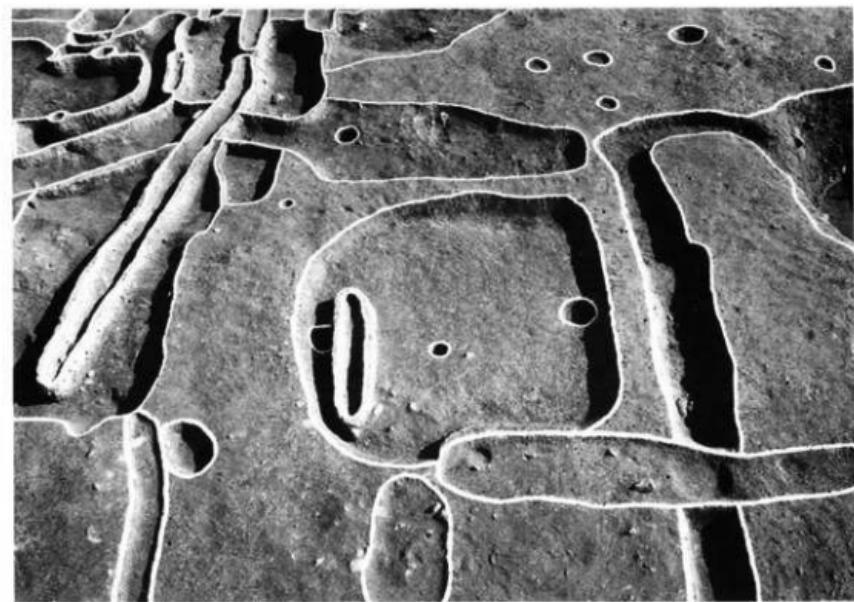
1. Ⅲ・Ⅳ区全景（南より）



2. Ⅲ区南側全景（南より）



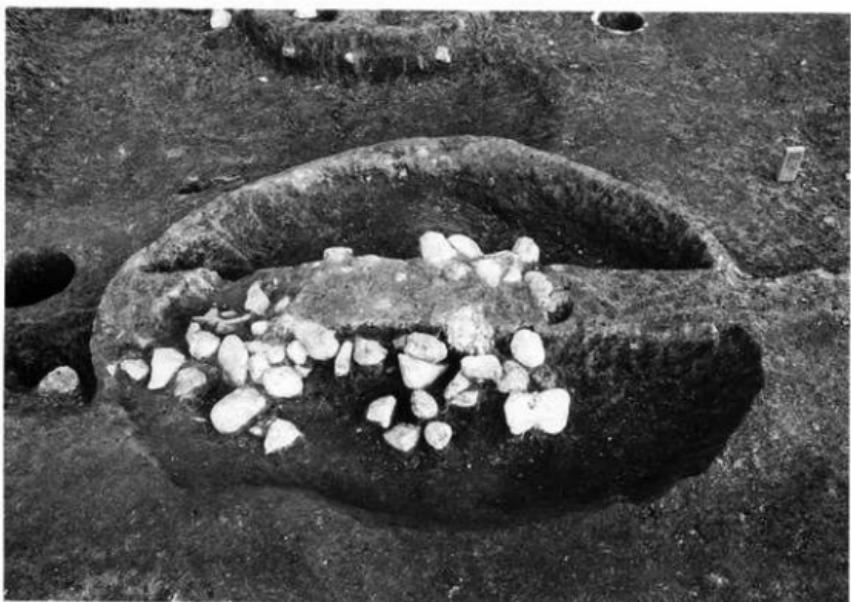
1. III区検出遺構（北より）



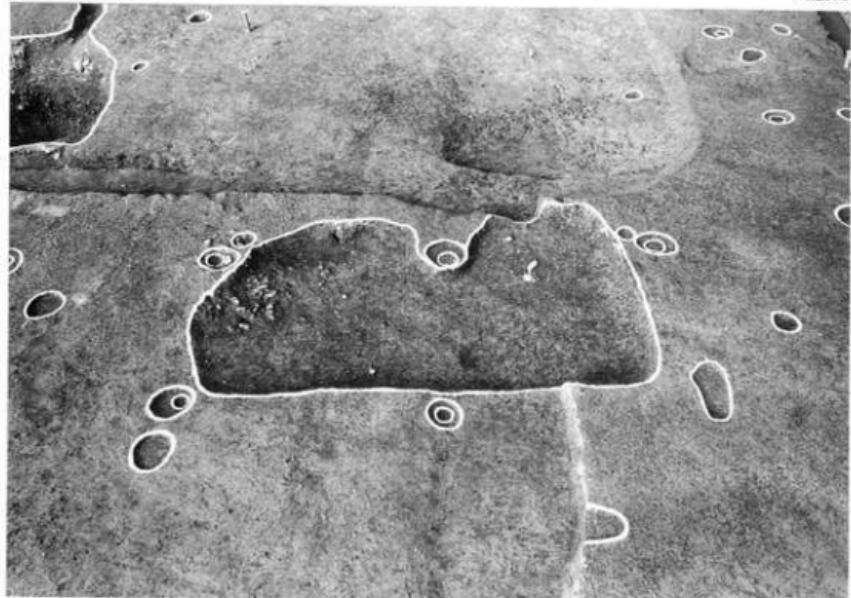
2. III区検出遺構（西より）



1. 165-OP, 166~168-OO全景 (西より)



2. 166-OO全景 (西より)



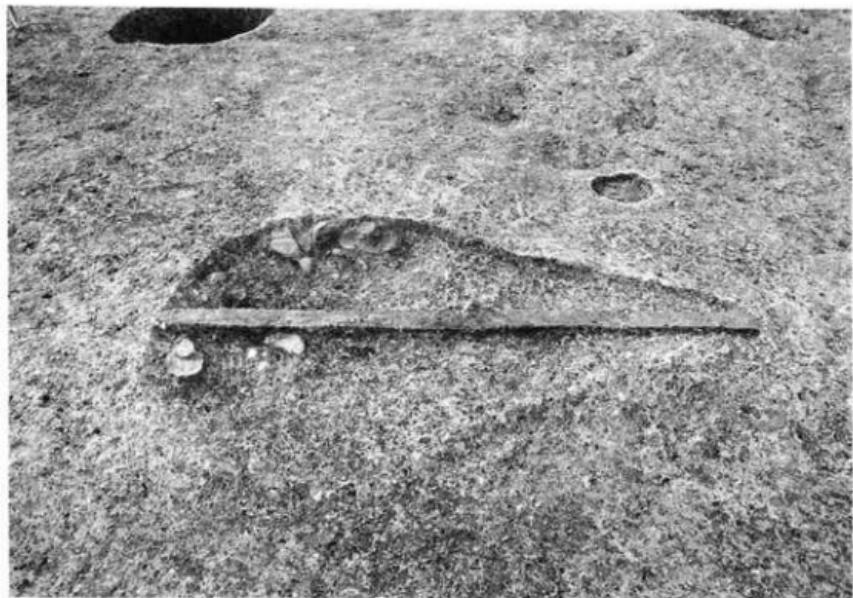
1. 200-OO全景（南より）



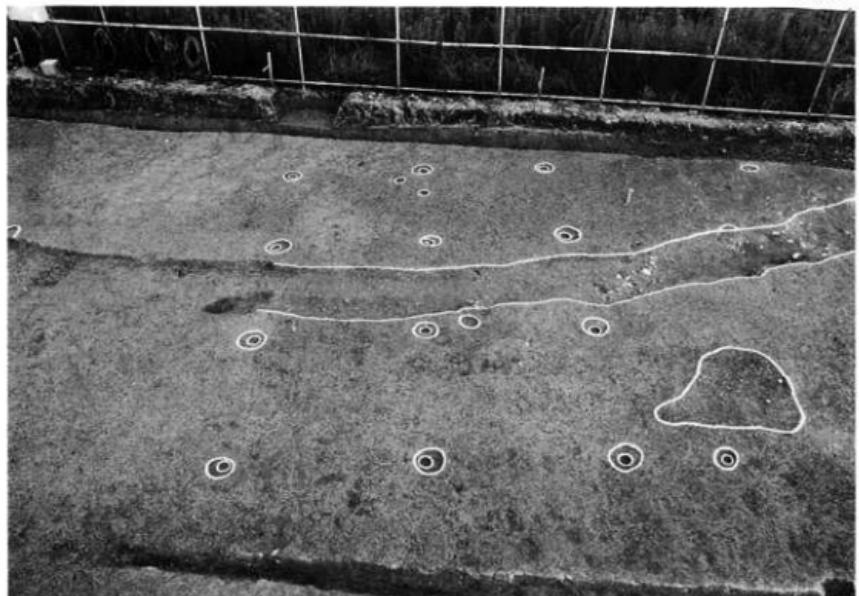
1. 200-OO遺物出土状態



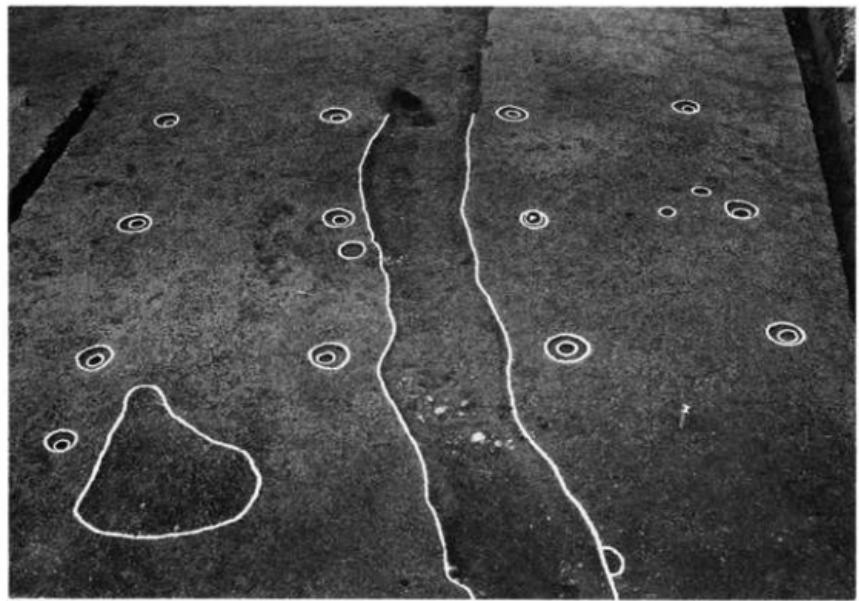
1. 200-OO遺物出土状態



2. 266-OO全景（北より）



1. 250-OB全景（西より）



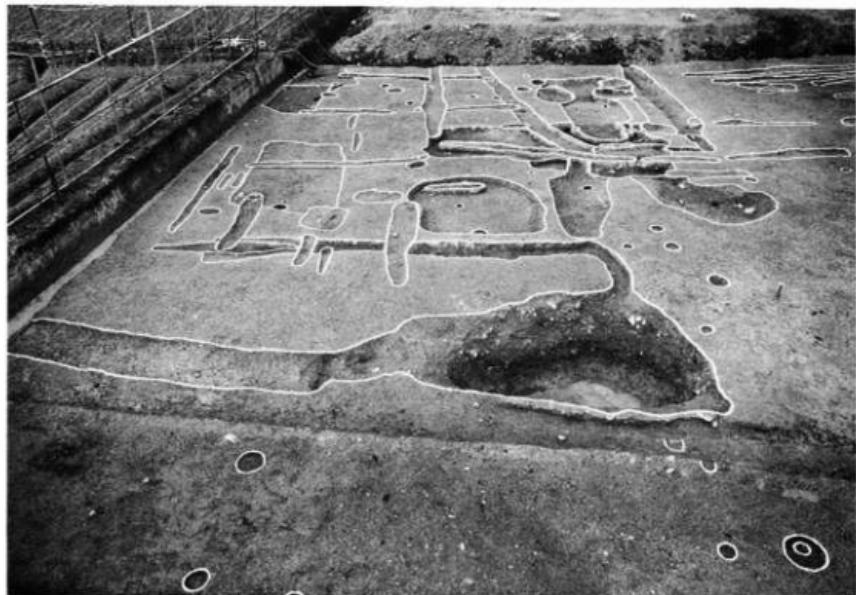
2. 250-OB全景（南より）



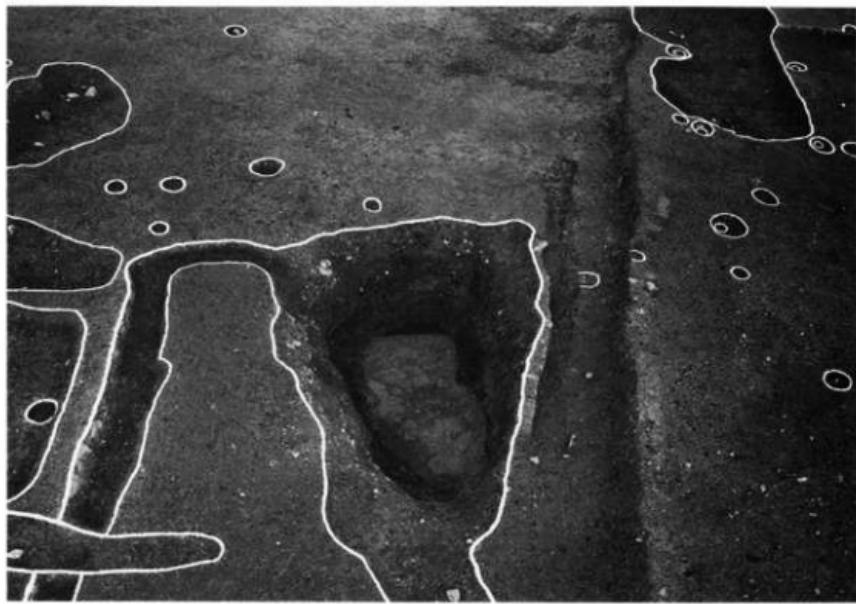
1. 228-OB全景（北より）



2. 228-OB全景（南より）



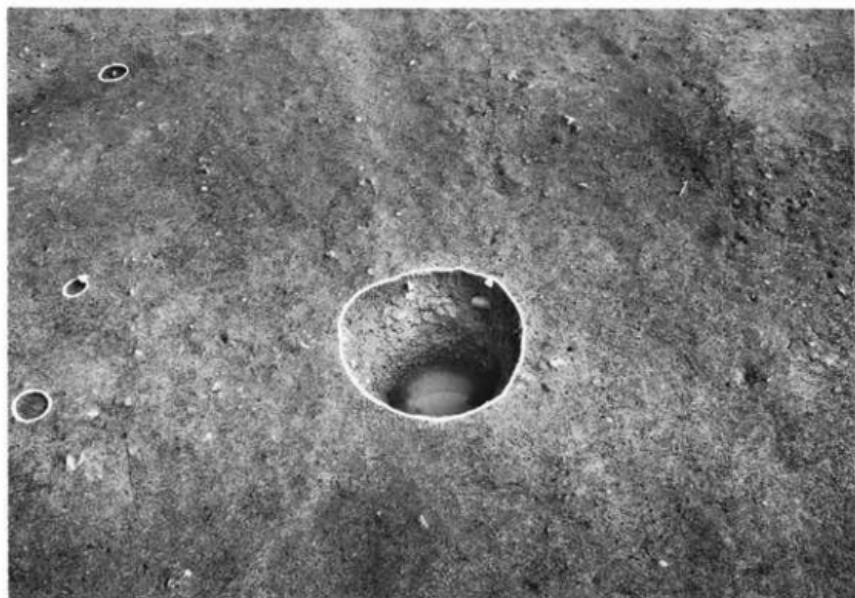
1. 184-OS全景（南より）



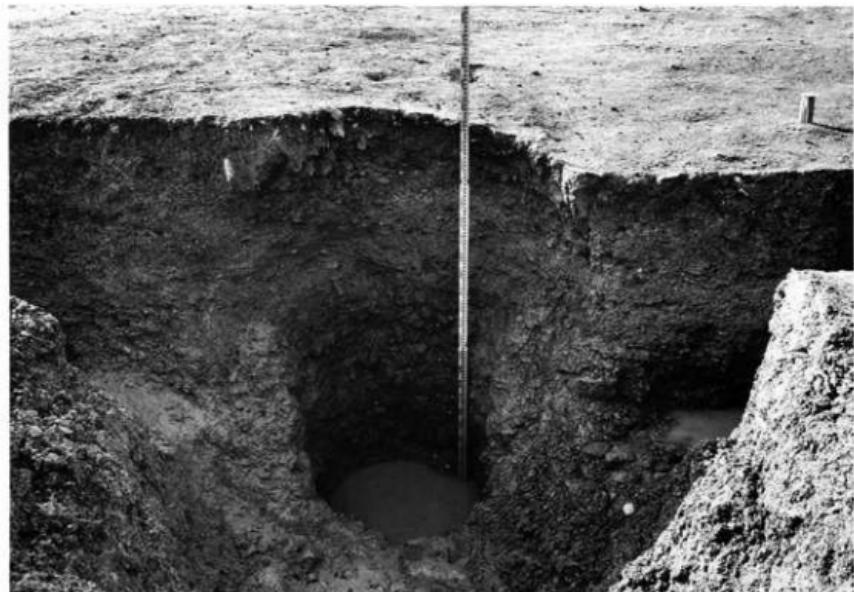
2. 184-OS全景（西より）



1. 229-OP遺物出土状態



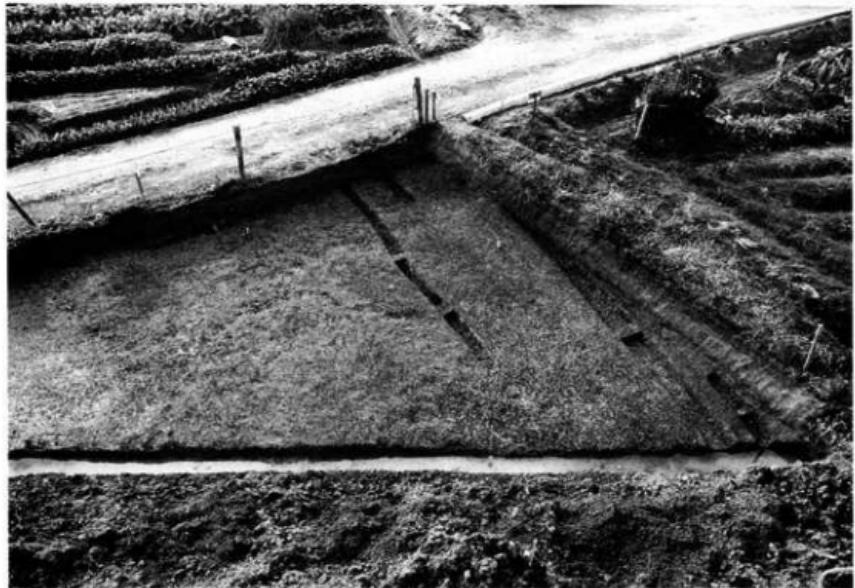
2. 199-OO全景（西より）



1. 301-OW全景（東より）



2. 201-OS全景（南より）



1. I区拡張部全景（東より）



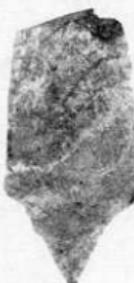
2. II区拡張部全景（西より）



15-128



15-129



16-130



9-107



8-103



8-98



8-104



8-95



8-100



9-114



14-124



14-122



14-127



6-17



6-10



6-1



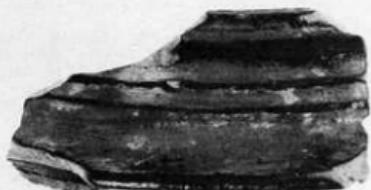
6-8



6-58



6-57



7-91



7-85



45-1



45-2



45-4



46-6



46-7



34-8



38-6



34-9



38-2



34-29



38-3



34-24



38-4



34-28



40-21



40-23



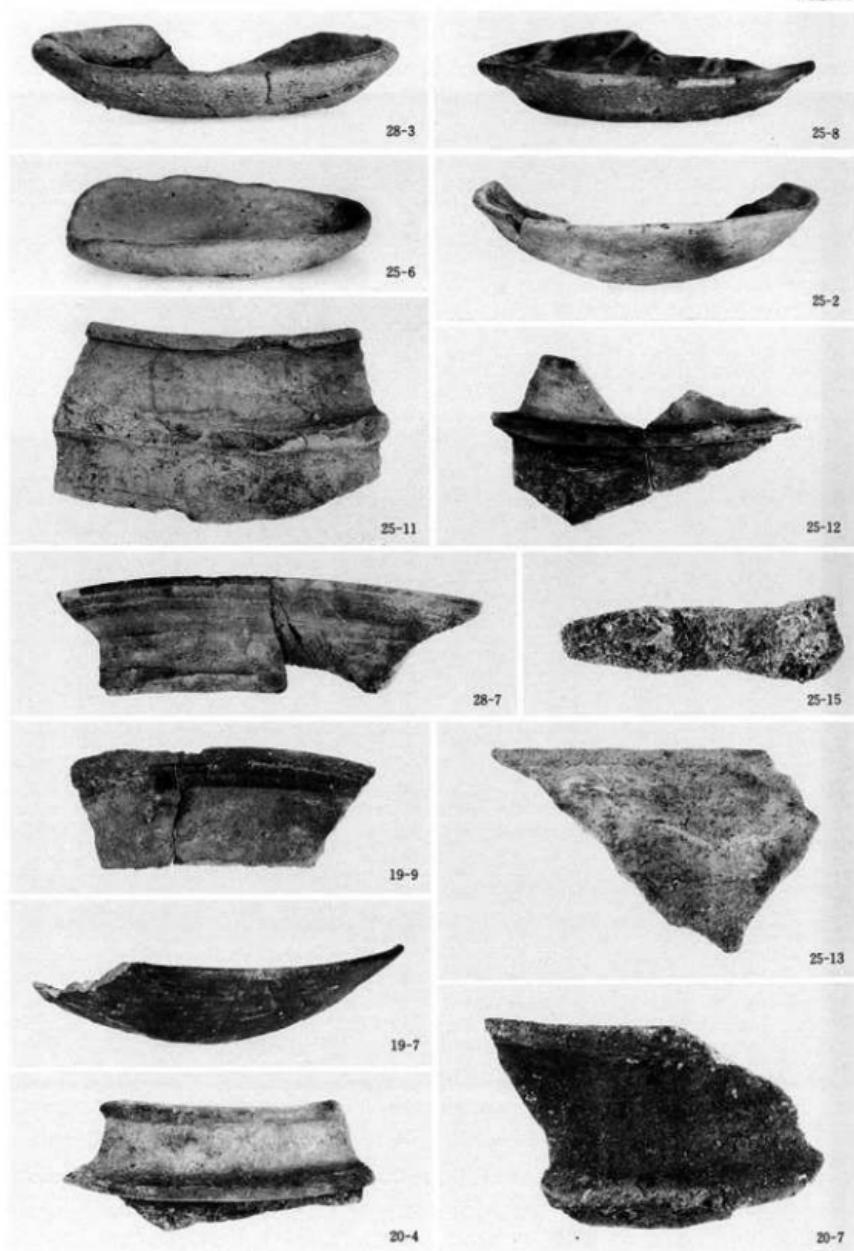
40-20



40-22



27-10



各造構出土遺物(2)



30-10



30-8



30-11



30-18



31-43



30-28



31-41



31-42



32-53



財大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第59輯

## 黒石遺跡

主要地方道岸和田・牛滝山・貝塚線建設に伴う  
発掘調査報告書

1990年5月1日発行

編集・発行 財団法人 大阪府埋蔵文化財協会  
大阪市中央区谷町2丁目2番20号 大手前ウサミビル  
印 刷 株式会社 中島弘文堂印刷所

